

# 大学生の自我同一性地位と卒業後の時間展望

本田時雄・引間紀江

## Relation between Ego Identity Status and Time Perspective in Undergraduates

Tokio Honda and Norie Hikima

我々は、受精の瞬間から死へ向かって加齢している。青年期以前は経済的、肉体的、心理的および精神的に成熟しておらず、親を中核とする家庭、学校および社会によって社会化され、養われている。青年期になると経済的にはともかく、肉体的、心理的および精神的にも成人レベルに達しつつあり、自分で自己の人生を選択・決定する力を持つようになるという。昨今、平均寿命の伸び、高学歴化、価値の多様化にともなって、ライフスタイルが多種多様になって青年期の定義がきわめて困難となってきた。それにもかかわらず青年期は、その中心課題としてErikson, E. H. (1968) が提唱した自我同一性の問題がある。その定義として、彼は①自己の斉一性、②帰属性および③時間的連続性・一貫性の3つの基準による主体的実存的感覚あるいは自己意識の総体を挙げている。その後Marcia, J. E. (1980) は、同一性地位に関してより具体的な基準によって同一性の諸相を提唱している。それは危機crisis (役割、職業、理想、イデオロギーなどが自分にふさわしいか否かについて迷い考え、試行する時期)の有無、自己投入(自己の定義を実現し、自分を確認するための、独自の目標や対象への努力の傾倒)の有無の2要因によって次のような4つのタイプに分類した。①同一性達成地位、②フォークロージャー地位、③モラトリアム地位および、④同一性拡散地位。また他方自分の人生を選択・決定する際に、行き当たりばったりでなく将来を見通すことが重要であり、五十嵐(1990)など多くの研究がなされている。しかしこれらの多くが計数的なもので、計量的なものはきわめて少ない。

### I. 目的:

- ① 青年期後期にいる大学生の同一性地位を測定する。
- ② 卒業後の時間的展望の程度を測定する。
- ③ 卒業後の時間的展望の長さを具体的な年齢によって測定する。

以上の3つの測定値を男女、学年、住まいの様式などに関して解析すると同時に、測定値相互の関係についても分析し、現代青年(大学生)の特徴の一端を明らかにしたい。

### II. 方法:

#### 1. 同一性地位判定尺度;

加藤(1983)が作成したもので、「現在の自己投入」「過去の危機」および「将来の自己投入の希求」の3つの変数の得点から次の6つの同一性地位を測定する。

- ① 同一性達成地位: 危機を体験し、現在自己投入の対象を持っているタイプ。

- ② 権威受容地位（フォークロージャー地位）：危機を体験せずに、両親や会社通念が支持するものを自己投入の対象としているタイプ。
- ③ 同一性達成—権威受容中間地位：①と②のどちらとも決めがたいタイプ。
- ④ 積極的モラトリアム地位：過去に危機を体験したか否かに関係なく、現在自己投入をしておらず、模索しているタイプ。
- ⑤ 同一性拡散地位：現在自己投入をしておらず、将来の自己投入の希求も弱いタイプ。
- ⑥ 同一性拡散—積極性モラトリアム地位：現在自己投入をしておらず、将来の自己投入の希求が不明確なタイプ。

## 2. SD法による生活イメージ尺度；

現在の生活について測定するために、都筑（1993）を参考にして、20対の形容詞・形容動詞からなるSD法尺度を作成した。クロンバック  $\alpha$  係数は0.916であった。

## 3. 大学卒業後の時間の展望；

大学卒業後の生活を考えている程度を、「非常によく考えている」「かなり考えている」「多少考えている」「あまり考えていない」「ほとんど考えていない」および「全く考えていない」の6件法によって回答を求めた。さらに「考えている」と回答した人に「何歳先のことまで考えているか」を尋ねた。

## 4. 調査対象者；

1994年度の4年制大学生（高崎経済大学、千葉大学および文教大学）。

## 5. 調査期間；

1994年11月

## 6. 調査方法；

授業後に配布・回収したり、直接手渡し、回収ボックスで回収した。

## III. 結果および考察

### 1. 同一性地位の分布

加藤（1983）の分類基準によって分類したところ、表1のようであった。男女いずれも、またどの学年でもD—M中間地位（同一性拡散—積極的モラトリアム中間地位）が飛び抜けて多く、権威受容地位（フォークロージャー地位）がもっとも少なかった。すなわち悩み多き、権威に迎合しないナイーブな青年像を示していた。学年、性別および住まいの様式（自宅、その他）との関連では有意なものは見られなかった。

表1 同一性地位の分析

	男	女	1年	2年	3年	4年	総数
A	8	3	1	3	3	3	11
A—F	6	5	0	4	1	4	11
F	3	2	0	2	2	1	5
M	13	7	3	7	5	3	20
D—M	47	55	11	43	23	23	102
D	6	8	2	5	3	4	14
	83	80	17	64	37	38	163

注)

A：同一性達成地位

F：フォークロージャー（権威受容）

M：積極的モラトリアム地位

D：同一性拡散地位

A—F：A—F中間地位

M—D：M—D中間地位

## 2. SD法による生活イメージ

同一性地位ごとに、各項目について一元配置の分散分析を行ったところ、次の項目に関して有意差が見られたので多重比較を行った。満ちた—空っぽな、魅力ある—魅力のない、困難な—容易な、前向きな—後向きな、発展する—停滞する、はっきりした—ぼんやりした、能動的な—受動的な (以上 $P < .01$ )、開いた—閉じた (以上 $P < .05$ )。多重比較の結果、いずれの項目においても同一性拡散地位群が他の5群に比して形容語対の後者の方に片寄っていた (図1参照)。したがって、同一性拡散地位群において現在の生活は「停滞した」「空っぽ」で「魅力のなく」、クライシスを体験していないためか「容易な」なものであると感じられている。これは自我同一性地位の分析から導かれた結果と対応していた。

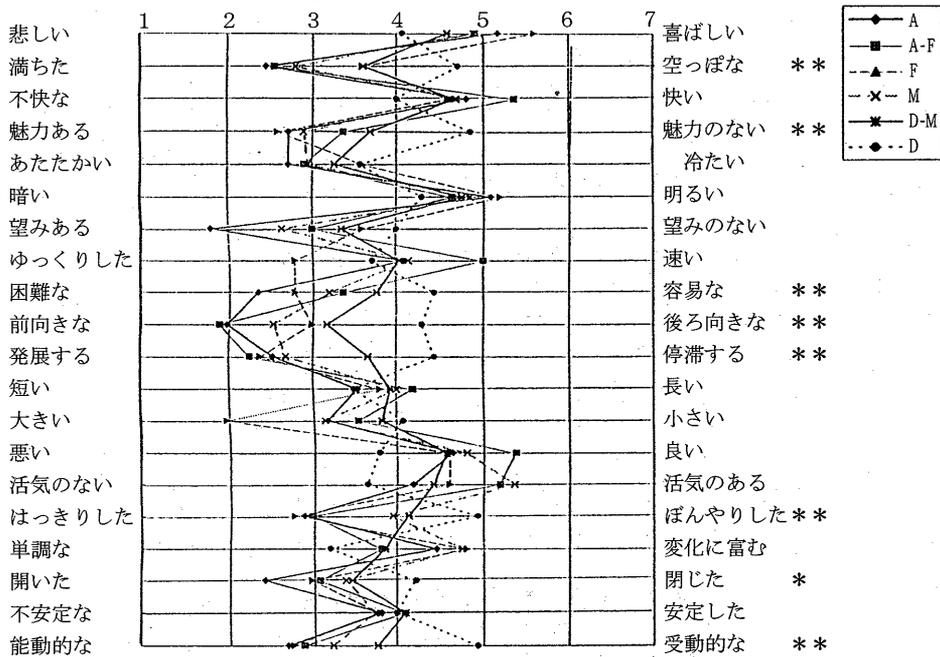


図1 同一性地位別の得点

\*  $P < 0.05$  \*\*  $P < 0.01$

## 3. 大学卒業後のライフコース展望

卒業後のライフコースについての回答では、「多少考えている」が44.78%で最多で、「非常に」「かなり」「多少」考えている人を合わせると82.20%と考えている人が圧倒的に多かった。

図2は「何歳まで考えているか」と具体的な回答を求めた結果である。32歳が15.63%で最多で、卒業後5年(27歳頃)までが10%前後で一塊となっており、50歳代—90歳代がそれぞれ2~3%であった。大学卒業後10年間の範囲を約73%の人が回答していた。32歳が最多なのは卒業後10年という大まかな読みと思われる。したがって彼らがClausen, A. J. (1993) の「planful competence」(青年期に具体的な人生設計ができる能力)を持っているとは残念ながら考えにくい。

表2は、同一性地位と大学卒業後のライフコース展望の程度に関連を示すものである。カイニ乗検定の結果、有意に大なる傾向が認められた。すなわち同一性地位の人のうち卒業後のライフ

コースを「考えている」人は11人中10人おり、またA-F 中間地位の人のうち11人中10人が「考えている」と回答していた。このことは、自我同一性の定義に「時間的連続性・一貫性」が含まれていることを考えると納得できよう。

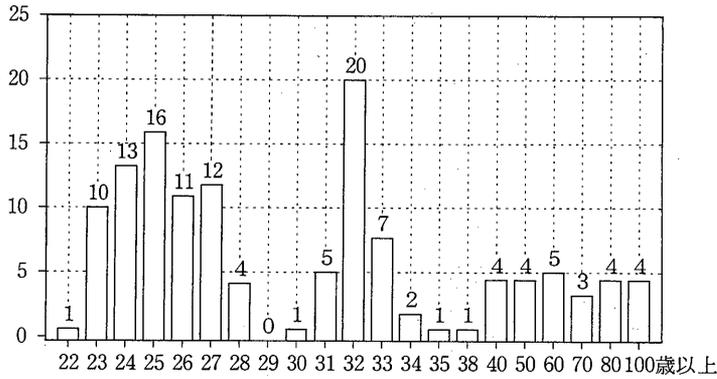


図2 予想された年齢のヒストグラム

表2 大学卒業後の時間的展望の程度

	1	2	3	4	5	6	
A	2	4	4	1	0	0	1 非常によく考える
A-F	2	6	2	0	1	0	2 かなり考える
F	2	0	3	0	0	0	3 多少考える
M	5	5	10	0	0	0	4 あまり考えない
D-M	5	27	46	14	6	3	5 ほとんど考えない
D	0	2	8	1	2	1	6 全く考えない
	16	44	73	16	9	4	$\chi^2=35.01, df=25, p=0.09$

表3 大学卒業後の時間的展望の程度

	1	2	3	4	5	6	
1年	1	4	6	3	2	1	
2年	2	12	36	7	3	3	
3年	6	12	16	2	1	0	
4年	7	15	12	3	1	0	
	16	43	70	15	7	4	$\chi^2=23.49, df=15, p=0.07$

表4 予想した年齢と卒業後のライフコースについて

要因	平方和	自由度	平均平方	F
級間	7571.09	2	3785.54	9.96
級内	47124.96	124	380.4	
全体	54696.05	126		$p < 0.01$

学年と卒業後のライフコース展望の程度の2元表と、カイ二乗検定の結果を示したものが表3である。検定の結果は10%水準で有意な傾向を示した。すなわち就職時期真っ直中の4年生、さ

らには卒業後のガイダンスの始まっている3年生などが「考えている」人が圧倒的に多かった。「考えている」人の中で、「自分の問題として感じられるか否か」を5件法で問うたが、上級生（3年生+4年生）と下級生（1年生+2年生）の有意差は認められなかった。（ $x^2=2.01$ ,  $df=3$ ,  $p=0.56$ ）。

表5 予想した年齢と学年

要因	平方和	自由度	平均平方	F
級間	1338.94	3	446.31	1.04
級内	53393.86	124	430.60	
全体	54732.80	127		n.s.

表6 予想した年齢と同一性地位

要因	平方和	自由度	平均平方	F
級間	6072.48	5	1214.50	30.5
級内	48660.33	122	398.86	
全体	54732.80	127		$p<0.05$

次に予想された年齢について、分散分析を行った。表4はライフコース展望の程度で、考えている3群（「非常によく」「かなり」および「多少」）に関する一元配置の分散分析表で、有意差が見られた。多重比較の結果、「非常によく」（56.25歳）が「かなり」（32.96歳）と「多少」（32.99歳）よりもきわめて長かった。

学年による予想された年齢に関する分散分析表は表5であるが、学年が上になるにつれて予想される年齢は上昇するものの、有意差は認められなかった。これを表3との関連で考察すると、上級生は将来をよく考えているが、それは眼前の卒業後の進路（就職）に関心が集中しているため時間的展望が長いとはいえない。

表6は同一性地位における予想された年齢の一元配置の分散分析において、有意差が見られた。多重比較を行ったところ、権威受容地位と同一性達成地位が非常に長く、次いでA-F中間地位、D-M中間地位、積極的モラトリアム地位の順で、もっとも年齢の若いのは同一性拡散地位であり、最初の2群は他の四群に比して有意に大であったが、そのほかでは有意差が認められなかった。

岡本（1986）によれば、青年期に自我同一性の獲得・達成された地位は、中年期にも再構成され、発達・変化するという。したがって今後は、青年期—中年期とフォローした研究が期待されよう。

## 文献

Clausen, John A. : American Lives, FreePress, 1993

Erikson, E. H. : Identity : Youth and Crisis, W. W. Norton, 1968 (岩崎庸理訳、主体性—青年と危機、北望社、1969)

五十嵐敦：青年期の時間展望—Cottle's Circles Testの検討と分析—、カウンセリング研究、23、2、133—141、1990

樋口良成：ライフコースにおける役割変動と地位—移行概念の検討と拡張、社会学年誌、33、23—31、1992

加藤 厚：大学生における同一性の諸相とその構造、教育心理学研究、31、4、292—302、1983

Marcia, J. E. : I identity in Adolescence. In Abelson, J. (Ed) Handbook of Adolescent Psychology, New York, Wiley.

- 南博文、光富孝：青年期における未来展望と有能感に関する研究、広島大学教育学部紀要第1部、38、241-248、1990
- 大橋靖、篠崎信之：青年におけるこれからの人生設計に関する研究—将来の転換点の分析を中心とした—、早稲田大学人間科学研究、5、1、81-95、1992
- 岡本祐子：成人期における自我同一性ステータスの発達経路の分析、教育心理学研究、34、4、352-358、1986
- 白井利明：時間的展望の生涯発達に関する研究の到達点と課題、大阪教育大学紀要第IV部門、42、2、187-216、1994
- 都筑学：大学生における自我同一性と時間的展望、教育心理学研究、41、1、40-48、1993
- Wells, L. Edward and Stryker, Sheldon、1988 (東洋・柏木恵子・高橋恵子編集・監訳)  
：ライフコースにわたる自己の安定性と変化；生涯発達の心理学2、新曜社、1993